# 史跡大安寺旧境内の調査 第146次

#### I. はじめに

奈良市では平成28年度から史跡大安寺旧境内の範囲確認を主目的として、継続的な発掘調査を実施しており、本年度で3年目となります。大安寺の寺院地については2つの案(図2)があり、いずれか判断する手掛かりを得るためには、六条大路の有無を確認することが必要です。平成28年度の調査では、六条大路南側溝と推定される東西溝を確認し、寺院地に六条大路があった可能性が高くなりました。平成29年度の調査では六条大路南側溝と推定される東西溝のほか、その北側約15m離れた位置で、北側溝と推定される東西溝を確認しました。

本年度はまず南大門南側に推定される塔院北門の検出を目的とし、その位置関係から、六条大路南側溝を確定させ、ひいては、六条大路の存在を確実にすることを主目的として、調査を行っています。

## Ⅱ.調査成果の概要

検出した主な遺構には、門1棟、溝2条、橋1梁があります。発掘区南半では、地盤をならすための整地を確認しました。

### (1) 塔院北門の遺構を発見

むなもん

南大門基壇南端から約32m南で、東西2本の柱からなる門を確認しました。築地塀の棟通りに取り付く棟門とみられます。門柱跡は東西双方とも南北約1.0m、東西約1.5mの平面形隅丸長方形です。掘方内には拳大・人頭大の川原石があり、これを栗石とみると、柱座だけでなく扉の軸受けの穴や、方立穴を設けた礎石(唐居敷、図4)を用いた礎石建ちの門であったとみられます。この場合東側門柱は礎石東辺に柱座が、西側門柱は礎石西辺に柱座が位置したとみられ、東西1間の規模は、北側に位置する南大門の柱間と同じ、5.1m(17尺)であったと考えられます。

2つの門柱跡の中央では、南北約 1.0m、東西約 0.5mの小穴を確認しましたが、これは扉の召し合わせ部分の留め、あるいは蹴放の土台となる礎石を据えたものとみられます。

### (2) 六条大路南側溝の存在と位置が確定

平成 28・29 年度の調査では、いずれの調査区でも六条大路南側溝と推定される溝を検出していましたが、断定できるまでには至りませんでした。今回確認した塔院北門との位置関係から、六条大路南側溝を特定できるようになりました。今回確認した六条大路南側溝(溝 1)は門柱跡から約 1.0 m北側に位置します。幅約 2.0 mで、検出面からの深さは約 0.2 mです。埋土から奈良~平安時代(8~9世紀)の遺物が出土しました。出土遺物は瓦類が大半を占め、これらは南側に想定される築地塀の所用瓦であったとみられます。

### (3) 六条大路路面上に溝と、これに架かる橋の遺構を確認

六条大路南側溝から約 4.0m北側で、幅約 3.5m、深さは約 0.4mの溝(溝 2)を確認しました。平成 28 年度調査区でも一連の溝を確認しており、埋土に奈良~室町時代(8~14世紀)の瓦を含むことも同様です。今回の調査では、この溝に架かっていた橋の橋脚跡が確認できました。橋は東西・南北とも 1 間規模で、柱間は東西 5.4m(18 尺)、南北 6.0m(20 尺)です。北東と南東の橋脚跡掘方内には、拳大の川原石があり、この上に礎石を設けた礎石建ちであったとみられます。南側の 2 つの橋脚跡は六条大路南側溝内に位置する事から、溝 2 も南側溝埋没後に掘削されたものとみられます。

大安寺南大門は寛仁元年(1017)に焼失して、しばらく後の13世紀半ば頃に再建が始まった事が史料と発掘調査から判明しています。このようなことから、中世の南大門再建とその周辺整備の際に、溝2が掘削され、橋が架橋されたものとみることもできます。

発掘調査地: 奈良市東九条町 1302-1 他 発行日: 平成 30 年 11 月 10 日

奈良市埋蔵文化財調査センター ARCHAEOLOGCAL RESEARCH CENTER , NARA CITY

